

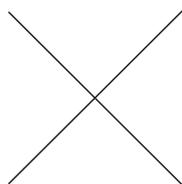
人事の哲学

東洋思想が斬る、ニッポンの今

現代日本のジレンマ ④

## 人にとって“働く”とは何か

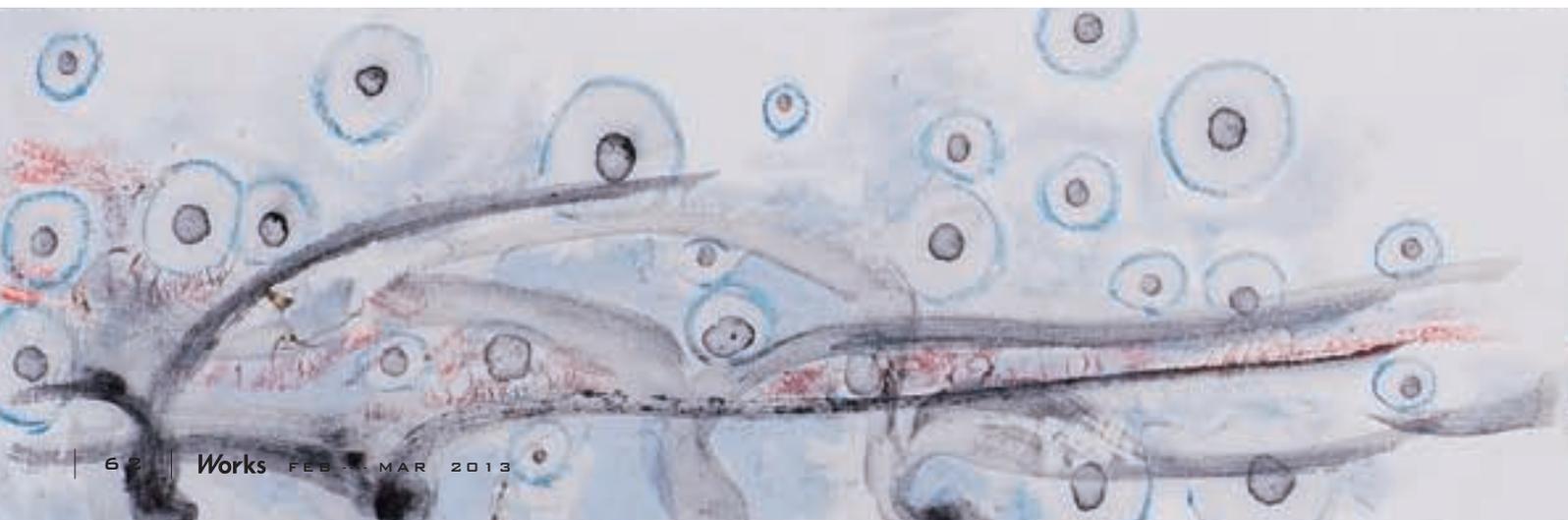
今、「働くこと」の意義を見失った人が増えている。一昔前なら、名の知れた企業に就職し、仕事に励んで失態さえ犯さなければ、収入もポストもまず安泰だった。しかし今は厳しい競争のなか頑張ってもなかなか手ごたえが得られず、見返りも少ないと嘆く人が多い。だが、「働く」とは地位や収入のためだけのものだろうか。よりよく生きるための手段ではなかろうか。今回は『論語』を読み解きながら、より高い見地から「働くこと」について考えたい。



# 孔子

中国、春秋時代の思想家。儒家の祖。自国である魯の役人となったが出世には恵まれず、弟子に教えを説く日々を過ごす。『論語』は孔子没後、弟子達はその教えをまとめた対話集。

Text = 千葉 望    Photo = 鈴木慶子、新井啓太 (書画)    題字・書画 = 岡一舛



## 田口佳史氏

Taguchi Yoshifumi\_東洋思想研究者。株式会社イメージブラン代表取締役社長。老荘思想的経営論「タオ・マネジメント」を掲げ、これまで2000社にわたる企業を変革指導。また官公庁、地方自治体、教育機関などへの講演、講義も多く、1万名を超える社会人教育実績がある。最近の著書に『孫子の至言』(2012年光文社)、『リーダーの指針 東洋思考』(2011年かんき出版)、『老子の無言』(2011年光文社)、『論語の一言』(2010年 同)。2008年には日本の伝統である家庭教育再興のため「親子で学ぶ人間の基本」(DVD全12巻)を完成させた。



現代の日本では「働く」ことを狭い範囲で、しかも分析的に論じることが多いのですが、中国古典は「働く」という一点のみを取り出して語ってはいません。それも含めて、「よりよく生きる」ということを重視しているからです。中国古典を知ることによって、そこから脱却し、より自覚的に仕事に取り組む道を探ってみたいと思います。

厳しい人生も「天命」を知れば豊かに生きられる

孔子は「子、川の上<sup>ほとり</sup>に在りて曰く、逝く者<sup>かく</sup>は斯<sup>や</sup>の如きか。昼夜を舍めず」

と言いました。人生とは死へと向かっているもの、これが大前提です。だからこそどのように「生きることを楽しむか」を大切にすべきなのです。働く意義を考えるなら、まず人生を高い見地から見つめ、「自分はこういう人生を歩みたい」と、本質に立ち返ってみてはどうでしょう。

学校を出ると「それが務めだから」という理由で企業に入り、そのまま毎日を過ごしている人が多く見受けられますが、清新な気持ちで会社に行けるのはせいぜい3年でしょう。漫然と会社へ行き、与えられた仕事をこなし、帰ってくるだけ。しかも目の前にある課題が厳しすぎて、見

直す余裕もない。だから40代半ばにもなると自分がなんのために生きてきたのかわからなくなってしまう。よい学校へ入り、よい企業に入れば幸福になれると教え込まれていけれども、現実はずらりと悩み、目標を失って苦しむ例が少なくありません。

40歳を「不惑」ということはよく知られていますが、50歳は「知命」。すなわち「天命を知る時期」なのです。50歳を迎える前に、誰もが一度深く考える時間を持ち、自分の天命とは何か考える必要があります。仕事を通じてどのように社会に貢献できるか見つめ直した結果、仕事に対しまったく別の意義を発見し、心新

## 子、川の上<sup>ほとり</sup>に在りて曰く、逝く者<sup>かく</sup>は斯<sup>や</sup>の如きか。昼夜を舍めず

人生とは、この川の流れのように死へと赴くもの。昼も夜も少しも止まらない



たに取り組めるようになった人を何人も知っています。

私が気になるのは、地位を得ることや金銭的に豊かになることを人生のゴールと考えるケースが多いこと。そう思い込んで走り続けてきたものの、地位を得た瞬間にむなしさが襲い、死にたくなつたという人もいます。当然でしょう。人生のゴールは天命を果たすことにあるのですから。

孔子は「命<sup>めい</sup>を知らざれば、以て君子<sup>た</sup>為ること無きなり」、自分に与えられた天命がわからないようでは、人を率いることはできないとも言っています。職業選択とは天命の延長として考えるべきものでしょう。

ここでいう天命とは、決して大きなことである必要はありません。生きていくうえでは誰も役割を持っています。子は子としての役割、親は親の役割、夫や妻の役割、社員としての役割があるはず。それをきちんと果たしていくことで、その上に

人生の確立があるといえましょう。世間的に活躍する必要はなく、きちんと生きることが大切なのです。

自分を枠にはめずに  
学び続けることが重要

働くことの原点は、人に羨まれる会社に勤めることでも、高い給料を得ることでもありません。孔子が「憤りを発して食を忘れ、楽みて以て憂いを忘れ、老の将<sup>まさ</sup>に至らんとするを知らず」と言っているように、時には社会的な問題に憤って行動し、食べることさえ後回しになるとか、楽しみが多くて憂いを忘れ、さらには自分が老いていくことさえ忘れてしまうぐらい仕事に熱中できれば、素晴らしいことです。つまり仕事を好きになる工夫こそが大切なのです。「敏にして学を好み、下問<sup>かぶん</sup>を恥じず」のように、知的好奇心や向上心が旺盛で、たとえ目下の人間にも質問す

ることを恥じなかった孔子は、のちに歴史に残る人となりました。このような情熱を、自分の仕事の原点として持つことが重要です。

しかし、日々の仕事に埋没し、そのような情熱が持てないという人も多いことでしょう。情熱をかき立てるためにはどうすればよいのか。それは、同年輩のすごい人に会いに行くことです。いくら吉田松陰や西郷南洲（隆盛）が偉くても、死んでしまった人物。発奮材料にするのはなかなかむずかしいものです。

しかし、同世代の人なら、「よし、自分も頑張らなくては！」と思えるはず。「憤せざれば啓せず」。発奮しなければ、自分を広げることもできません。刺激を求めてどんどん外に目を向けてください。

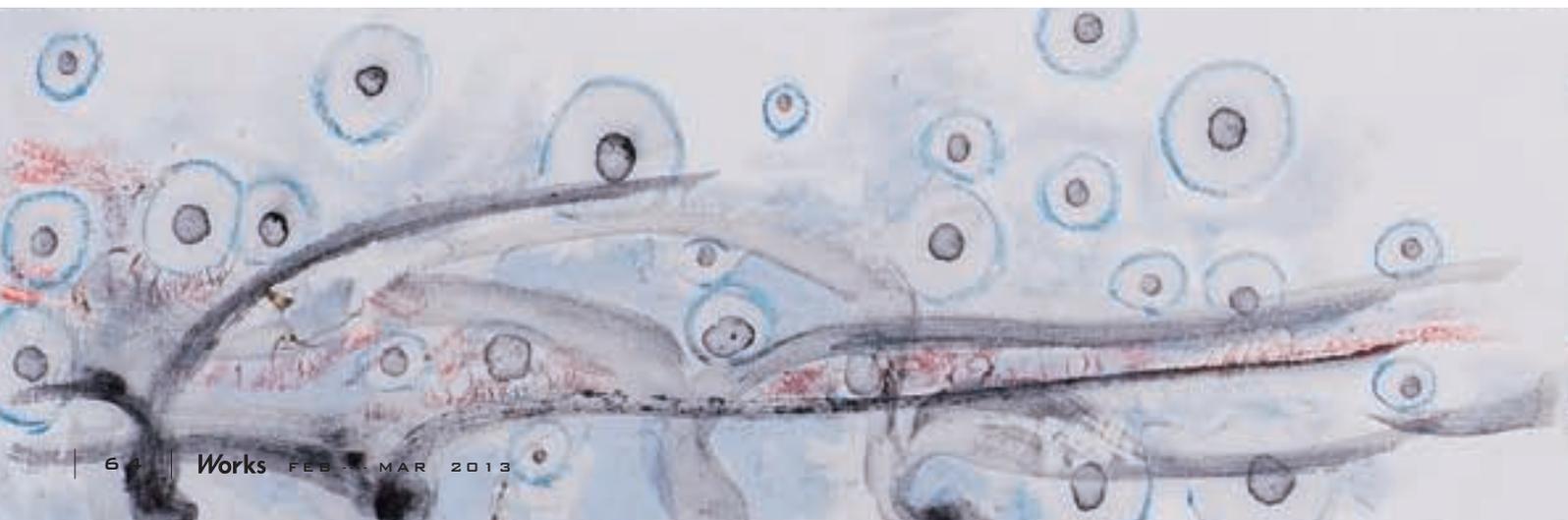
最も愚かなのは、自分で枠を作り、そのなかに閉じこもってしまうことです。「再求<sup>ぜんきゅう</sup>曰く、子の道を説<sup>よろこ</sup>ばざるに非ず。力足らざるなりと。子曰

## 命<sup>めい</sup>を知らざれば、以て君子<sup>た</sup>為ること無きなり

自分に与えられた天命がわからないようでは、人を率いることはできない

## 憤りを発して食を忘れ、楽みて以て憂いを忘れ、老の将<sup>まさ</sup>に至らんとするを知らず

熱中するあまり食べることも忘れ、楽しむあまり心配事も忘れ、自分が老いてしまったことにも気づかない



## 君子は憂えず懼れず。(中略) 内に省みて疚からざれば、 夫れ何をか憂え何をか懼れんと

君子は心配事や、悩み事、おそれるものがない。心のなかにやましいことがなければ、何を憂え、懼れるのか

く、力足らざる者は、中道にして廃す。今女は畫れりと」。孔子の弟子の再求は、「先生の教えは素晴らしいと思いますが、私の力で実行するのは不可能です」と言います。そのとき孔子は、「力が足りない人間なら道半ばであきらめるもので、今のあなたは最初から自分を見限っているだけだ」と諭すのです。

「できない」という言葉は、プロなら口に出してはならないもの。実力向上のチャンスと捉えるべきです。

日々埋没し、向上心を失ったとき、人は目標もまた失います。惰性のままに流れていく毎日にやりがいをなくし、ただ老いるだけの人生にどんなしあわせがあるのでしょうか。常に学び続けるなら、自ずと人生は豊かなものになります。

「学びて時に之を習う。亦説ばしからずや」。孔子は学びのなかに悦び(説は同義)があると語っていますが、「悦び」は「喜び」とは異なります。「喜び」は瞬間的なものを意味し、「悦び」は何度でも繰り返

わくものです。何か自分のテーマを持って学び続けると、1つわかっても次々に新しい疑問がわくはず。それを解いていくうちにさらに発見がある。そんな知の悦楽を知った人なら、実り多い人生を送ることができます。また、学びを通じて、徳を高めることもできるに違いありません。「徳孤ならず、必ず隣有り」。社会的地位を得て、金銭に恵まれても、信頼できる友人もおらず、孤独な人生を送る人は少なくないものです。ところが、天命を知り、学び続けることによって人徳を高めた人の周りには、必ず友人が集まってきます。どれほど苦しいことがあっても、よい仲間や家族がいれば、人は乗り越えていくことができるでしょう。

人生とは心がけ。  
今、与えられた役割に感謝して

「君子は憂えず懼れず。(中略) 内に省みて疚からざれば、夫れ何をか憂え何をか懼れんと」と孔子は言い

ます。君子は自分のなかにやましいことがない。だから何もかも憂うことがなく、恐れる必要もない。自分でやましいことをせず、堂々と生きればよいのです。それがよりよい人生を送るためのポイントといえます。また、「君子は坦として蕩蕩たり」とも言っています。憂うことなく、恐れることもなく生きているので、君子はいつもおおらかでゆったりとしています。それがまた人を引き付け、人生を豊かにしていくのです。

日々の仕事は高い目標を課せられ、苦しいことばかり、という方が多いかもしれません。しかし広い視野から自分の仕事を見たとき、社会的意義の大きさを感じるとか、今苦しくても大きな成長のチャンスがあると思えるなら、そこには潤いが生まれます。「今、このときにこのように仕事に打ち込むチャンスを与えられることがありがたい」と思えるかどうか。ぜひもう一度、高いところから人生を見直し、そこに隠れたチャンスを発見してください。